

懇談会

日本てんかん学会 (JES) の正当な
国際的評価を目指して

Current Status and Perspectives of Japan Epilepsy Society

兼 子 直^{1,2)}

田中理事長の下、新理事会が発足し、新理事の多くが等しく危惧していた問題はアジアに於ける日本てんかん学会 (JES) の相対的地盤沈下であり、「JES の活動が国際的に理解されていない」というものであった。各会員個々の活動は活性化しているのではあるが、それが国内外を通じて認知されておらず、結果として JES 会員が国際的にリーダーシップを発揮する機会が少なく、JES のみならず各会員も正当に評価されていない状態にあるという認識であった。先達が営々として築いてきた研究・臨床実績の評価も follow が無ければ埋もれてしまう可能性がある。そこで、JES の各委員会では対策を協議していたが、ここでは進行中の幾つかの対策 (情報の集約・公開と国際的発信) を紹介したい。

1. 情報の集約と公開

これまでは国際的活動、特に ILAE や AOEC の動きがどのような流れにあるのか、その詳細は会員には十分には理解されておらず、一方で ILAE 委員会へ参加している会員はどのように選ばれ、どのような立場で参加しているか、その際の旅費はどのようなになっているのか、等、課題が山積していた。対策としては、現在、国際関係の委員会などで活躍されている会員の活動状況を調査し、また新たな動きを報告していただき、それ

を学会のホームページや「てんかん研究」誌上で可能な限り早く会員へ公開するようにした。現在の ILAE、AOEC 等の各委員は JES で認知し、JES の了解の下で活動し、各委員は連携しているので、委員の発言は当然重みを増すことになる。委員会参加旅費の一部は JES で負担することになり、地理的に不利な状態にある日本からも参加すべき委員会へは出席・発言しやすくなってきている。

2. 国際的情報の発信

この目的のため、JES では英語版ホームページを立ち上げ、電子ジャーナル Epilepsy and Seizure を立ち上げた。これらは JES の国際化を一気に高め、JES の活動は国際的に評価が高まると推測され、結果として JES 会員全体への評価も是正されよう。国際担当委員会としては、前者は海外からの会員増加にもつながり、後者はこれまで海外から認知され得なかったすばらしい国内の研究を海外へ発信する大きな原動力になるものと確信している。理事、評議員の諸先生には、年間 1 報は是非、本誌へ投稿願いたい。Epilepsia、Seizure へ追いつくには、先ず、Pub Med への掲載、次いで impact factor の獲得が課題と考えている。

1) 日本てんかん学会国際担当委員会委員長

2) 弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座教授

〒036-8562 弘前市在府町 5)

Sunao Kaneko, MD

Professor, Department of Neuropsychiatry, Graduate School of Medicine Hirosaki University

3. 若手の育成

国内の若手研究者の育成なしには JES の発展は望み得ない。研究の醍醐味を味わっていただき、てんかん学へ足跡を残せるてんかん研究者・臨床家を育成するのが課題であるが、本年度 JES では Venice で開催される ILAE のセミナー Advanced International Course : Bridging Basic with Clinical Epileptology 3 (2008 年 7 月 28 日から 8 月 8 日)へ若手 10 名を送ることを企画した。参加した若手が海外の研究者と共に学び交流することは、帰国後の本人の意欲を高めるだけでなく、周囲の若手を刺激し、新たな研究者育成の上で大きな効果をもたらすものと考えられる。

4. 学会・地方会の活性化

全国に JES の地方会が立ち上がり、てんかん研究の裾野が広がりつつある。地方会での活発な情報交換は若手を育成し、JES を活性化する。地方会の活性化が飛躍的な会員増へつながることを期待している。

5. 研究の国際化

現状のてんかん研究を飛躍的に向上させ、国際的に影響を与える研究成果を発信するには、国内にあっては共同研究が必須である。共同研究により、より短期間で質の高い研究（臨床では十分な症例数の確保など）を展開し、世界へその成果を

発信すべきと考える。世界のてんかん臨床、てんかん研究へ影響 (impact) を与える研究が望まれるが、それには腰を据えた 10 年単位の臨床共同研究も必要であろう。海外との共同研究にも大きな意味がある。とくに、若手にとっては海外の研究者との相互作用の中で将来世界をリードする仲間を作ることが出来、彼らとの連携により国際的研究者への道も開けよう。指導者は常に海外の動向へアンテナを張っておくことが望まれるが、一方では original 研究を常に展開し、ある程度先が見えた段階で国際共同研究へと展開することも出来よう。かかる動きがこれまで少なかったように思われる。また、国際シンポジウム、国際学会等の開催は積極的に開催すべきであり、この分野では今後も JES の果たす役割は大きい。

6. 最後に

1 から 5 に記したように、現理事長のリーダーシップにより、JES は大きく変身した。JES が国際的に存在を証明する舞台は整いつつある。先達の業績が基礎、臨床を問わず国際的に正当な評価を得るための努力だけでなく、若手を国際的に売り出し、アジアのリーダーとして周囲を牽引し、明確に 3 極 (日・米・欧) 構造を構築するのが次の課題となろう。国際担当委員会では、多くの会員からの JES の将来へ向けた助言を期待しています。